締默の不登校生徒とのプレイセラピィ
——キャッチボールを行いつつ——

大石 英史

A Process of Play Therapy with a Student of School Refusal Displaying Elective Mutism

Eiji OHISHI

1. 問題と目的
本稿では、軽度ではあるが場面締默の症状を持ち、高校入学後より不登校になった、ある少年とのプレイセラピィについて紹介する。一般に、思春期に入ると大人に対する反発や自尊感情の発達により、本人が自分から心理的援助を求めてくることは少なくなり、また、実際に心理面接をはじめても話題が続かないことが多い。この少年は、児童期より、学校に行くと言葉が出なくなるという場面締默の症状があり、中学生までは無口な性格の生徒として何とかやってきたが、高校入学時の自己紹介の3分間スピーチで言葉が全く出なかったこと、そして、野球部に入ったが掛け声が出せず、これまでにないハードトレーニングを受けたことをきっかけに不登校になり、その後、高校教師の紹介で、母親と二人で大学の心理教育相談室を訪れた。言語を媒介とするかかわりははじめから期待できなかったが、本人が野球が好きであるという情報をあらかじめ得ていたので、来談当初から、本人を面接室には誘わず、校庭に出てキャッチボールをはじめた。結局、1年間計40回にわたってかかわったが、セラピストである筆者の方は、言葉によるやりとりがほとんど成立しないことからくるマンネリ感、あるいはクライエントに変化が見られないことに対する焦りと無力感に襲われることもしばしばであった。

しかし、このようなマンネリズム、焦り、無力感等の諸感情は、場面締默という症状を持つクライエントとかかわる際に、セラピストの側の引き起こされるかかなり一般的な感情であると同時に、思春期という発達段階にあるクライエントとかかわっていると、とかく援助の方向性を見失いやすく、そのような場合にかなり普遍的にセラピストに感じられてくる、ある種のやりにくさのようにも思われる。

本稿の目的は、不登校の締默少年とのキャッチボールによるプレイセラピィを、クライエント本人とのかかわりを中心に見直し、その一連のプロセスの意味について考察することである。それを通して、場面締默や不登校という症状や現象を越えて、思春期・青年期のクライエントと、一見成果がなかなか目に見えない中でかかわりを続けていくことの援助的意味、また、セラピストの側に必要とされる態度の柔軟性あるいは技法上の工夫について検討してみたい。
2. 事例の概要
インテーク面接時に母親によって語られた本人の生涯歴および家族に関する情報は、次の通りであった。

(1) クライエントの生涯歴
幼児期…登園拒否の時期があった（母親との分離不安が強かった）。
小3……転校して祖父母との同居がはじまり、胃潰瘍にて1か月入院。小学校時代の成績は中程度、交友関係は少なくおとなしい子であった。
中2……1学期、バスケットボール部のハートトレーニングで胃痛、時折登校ぶりが見られる。一人親友がいる。時々祖父と激しい喧嘩になり、やけを起こすと、頭を壁にぶつけるなどの自傷行為が見られる。プロ野球が大好きで、巨人軍の中畑と西本のファンである。
高1……市内の公立工業高校へ入学。3分間スピーチと野球部のハートトレーニングをきっかけに、ゴールデンウィーク後より不登校となる。これまで、反抗期と呼ばれる時期はなく、ストレスが内向的胃にくるタイプである。趣味は野球とテレビ。教科では英語が嫌いだという。

(2) 家族構成

<table>
<thead>
<tr>
<th>祖父</th>
<th>父</th>
<th>本人（高1）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>祖母</td>
<td>母</td>
<td>妹（中1）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>妹（小5）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

父……土木業、仕事多忙。性格はおとなしく、無口。本人に対しては放任（どう接すればいいのかわからない）、母親なかせ。話しかけても本人が口を開かず苛立つこともあった。

母……事務パート。性格は神経質で、本人に対しては甘やかし（手を掛け過ぎた、何でも先回りしてやっていった）。本人の不登校に対しては焦りの気持ちが強く、高校ぐらいは出ていてほしい。義祖父母との葛藤、夫とも気持ちが通じていない（夫に相談しても返事が返ってこなかったり、男性として頑なに）。仕事をしていたらときが一番ホッとする。

妹たち……本人とは比較的仲がよい。

祖父……家庭内では一番権威を持っている。性格は頑固で、何かあるとすぐ口を出してくる。最近は、ポケが始まってきた。

祖母……本人に対して要求が強い。

祖父の代は、農家をしており、現在は兼業。本人は今でも農作業など家の手伝いをよくする。家庭では母親と妹以外とはほとんど話さない。ただし、学校の話題になると母親にも心を閉ざす。これまでに反抗期らしい反抗期はなく、自分の意思表示をすることが非常に苦手であり、母親によると、何かを尋ねたときに返事がないときは、「嫌」という意味
だということであった。

3. ブレイセラピの経過
(1) ブレイセラピにおける時間の構造化
　高校の生徒指導担当教諭から、大学の心理教育相談室を紹介され、母親と本人の二人が来談する。母親の面接は、中年の女性セラピストが、本人は筆者が担当する。なお、母親面接については、教育的ガイダンスを中心とした心理的サポートが、最初の3ヶ月にわたり計8回行われた。それ以後は、本人が一人でバスに乗って相談室に通う。
　本人については、言葉による面接は成立しなかったが、野球が好きであることを母親のインターネット面接で聞いていたので、初回より二人でキャッチボールを行うことにした。
　以下、クライエントである本人を“CI”、セラピストとしてとかわった筆者を“Th”と記す。来談初回は、相談室のある建物の中庭でキャッチボールを行ったが、少し狭かったので、2回目からはグラウンドに出ることにする。
　言葉のないキャッチボールは単調で、1時間の時間をもってましたが、したがって、回を追うごとに少しずつブレイセラピの内容を工夫し、時間を構造化していた。その結果、数回のセラピートによって、ようやく時間の過ごし方に次のような落ち着いた形が出来上がっていた。まず、グラウンドのジョギング2回（1周約400メートル）→準備運動（一斉に柔軟体操を行う）→二人とも立ってキャッチボール→CIがビッチャー、Thがキャッチャーとなってのキャッチボール→休憩（このときタイミングを見てThから少し話しかけてみる）→バッティング（一方がボールを投げ、もう一方が打つ場合と、一方が自分で打ったボールをもう一方が取る場合の2通りを随時ローテーション）。これらを全部やり終えると時間が来るので、軽く整理運動をして終了する。なお、雨の日はグラウンドが使えないので、プレイルームで卓球をして、時間を過ごした。

(2) CIの変化過程
　回を重ねるにつれ、来談してくれるCIの表情が次第に緩んでいった。4回目のブレイセラピ（以下、#4のように記す）では、CIが力の加減を間違えてボールがThの頭上を越えてしまったとき、「アーッ」と叫ぶ。ThはこのときはじめてCIの生の声を聞く。
　#6では、ビッティングの時に一球ごとにモーションを掛けて投げるようになる。#10では、Thが打った球がグラウンドの屏を越え、たまたまそこを通ったりかかったトラックの荷台に乘っていくというハプニングが起こった。このときCIは、屏の方を指差しながら、「屏でトラック・・・乗った・・・」と単語を並べるように説々とその状況について語ってくれた。また、#8において、ジョギング後の柔軟体操の時にCIの身体にはじめて触れてもみたが、まるで板に乗せているように緊張し堅かった。しかし、その後、さらりらない形での柔軟体操（スキンシップ）を繰返していくうちに、#17には、Thの「すこし緩めてごらん」という声掛けで、自分の身体の緊張を緩めることができるようになる。このように心身の緊張がほぐれていいくのに伴い、CIはブレイセラピの場で少しずつ自分の力を発揮するようになった。例えば、Thが強い球を投げると#16には、CIも強い球を投げ返すようになっただけ、その頃よりジョギングのラストパートではThを振り切ってゴールするようになる。

—17—
言葉のよるコミュニケーションについては、プレイセラピィの合間にThから話しかけても、瞬間表情が優しく、言葉が返ってくることはなかったが、野球のことについての質問にはうなずきの形で答えてくれる。#17において、Clがピッチングしているとき、その球が見事にカーブしたのをThがキャッチし、そのことを伝えると、とてもうれしそうであり、それをきっかけに、Thがカーブの投げ方を教えて欲しいというと、身振り手振りで教えてくれる。その後、#19からは、相談室ではなく、自分が大先進しているグループを家から持ってきて使うようになった。また、この頃より、プロ野球（巨人の選手のことや、日本シリーズのことなど）の話になると、時折声の混じった表現が出てくるようになった。ただし、学校についての話題になるとあからさまに拒絶的になった。

高1も終わりに近づいたとき、高2への進級をめぐって、学校と親の双方より復活へのかなり強い働きかけがあり、Thも何度かClの意向を確かめようとしたが反応は堅く、Thは最終的に、Clに向かって真摯に「学校はあんな方が行きたいければ行けばいいよ。そうじゃなかったら、親が何言ってても行かなければいい」と話した。そのとき、Thの言葉を通じて聞いていたClの表情は、真剣そのものであった。結局、Clの無言の意思表明により、休学の手続きは取られたものの復活はせず、母親が探してきたアルバイト（壁の塗装の仕事）をするという生き方を本人自らが選択し、面接は終結に至った。

以下、表1.は、プレイセラピィ全体の経過である。

表1. プレイセラピィの経過

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>回数</th>
<th>プレイセラピィの内容 (Thの工夫)</th>
<th>Clの言動およびその変化</th>
<th>その他の出来事</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>機械的で単調なキャッチボール</td>
<td>やや強い球を投げてくる</td>
<td>はじめての雨（プレイルームで卓球）</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>ジョギングをはじめる Clにピッチングさせる</td>
<td>はじめ別の表情</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>準備体操をし、休憩をとる Th、カーブ投げる</td>
<td>「アーッ」という声 表情がやわらかくなる</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>バッティングをはじめる</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>プロ野球のことについて話しかける</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>6</td>
<td>一球ごとにモーションをかけて投げてくる</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>バットの持ち方やボールの投げ方について尋ねる</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>準備運動（はじめての身体接触）</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>10</td>
<td>卓球、ピンポン球の打ち合い（お互い熱中する）</td>
<td>単語を並べるように状況を語る はじめてひとりで来る（台風で大雨の日）</td>
<td>うれしいハプニング</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>13</td>
<td>はじめて25分連続</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

---18---
ランニングでThを振り切ってゴールする こちらが強い球を投げれば強い球を投げ返す
Thの指示により身体の緊張を抜くことができる 「ハーブボール」という言葉が出る
プロ野球の話になると表情が生き返る
自宅より自分のグローブを持ってくる

母親より電話があり休み（日本シリーズのため？）
来ていたにもかかわらず、時間を間違え、Thと会えないまま帰る

はじめて相談室のドアをノックする
球にスピードが乗ってくる

Thのマンネリ感、再び強まる

4000m走のラスブースタードでは
Thを追い越していく

面接時くこの時間に何が一番やりたい？」と尋ねると、「野球のトレーニングがしたい」という返事
「ラスト！」と声を掛けると懸命に頑張る

何を聞いても無言のまま
胃の調子が悪いということで休む（身体化！）

球が自分を越えて飛んでいくと「ファーウ」って大声に出す
ピン球を踏んで割る

ちょっとは行ってもいい」を選択
4. 考察
(1) キャッチボールによるコミュニケーション

青年心理学では、高校1年は青年期の中間期にあたり、この時期は、エリクソン（1959）が指摘するようにアイデンティティの確立という人生における重要な発達課題を達成しなければならないという意味で、心の動揺の激しい時期である。精神内面では、自尊感情の高まりが見られる反面、ちょっとしたことで劣等感に苛まれたりしがちである。また、高校は義務教育からはじめて解放される時期でもあり、生徒たちはそれぞれの形で自分の自由なあり方を模索し表現するようになる。ところが、本CIの場合、入学当初からそのような活発な雰囲気下に溶け込みなかった状況に加え、3分間スピードでの失敗や先輩後輩のタテ関係に基づく部活動でのハードトレーニングでの挫折体験が追い打ちをかける形となり、不登校を余儀なくされた。

発達段階的には言葉による面接が可能な時期に達してはいたが、軽度の緘默という症状を持った本CIの場合、言葉によるセラピイははじめから成立しきれなかった。ただし、インターネット面接で母親から、CIが野球には強い関心を持っているという情報を得ていたので、これをかかわりの唯一のチャンネルとして活用し、キャッチボールによるプレイセラピイを行うことになった。
しかし、実際にはじめてみると、キャッチボール自体が、言葉によるコミュニケーションと非常に類似していることが実感される。例えば、キャッチボールが続くようにお互いが配慮しあうこと、相手が投げたボールをこちらがどう受け止めどう投げ返すか、そしてこちらが投げたボールを相手がどう受け止めどう投げ返すかという相互対答性、さらにその応答の中に自分の攻撃性を込めたり込めなかったりすることなど、通常の言葉によるコミュニケーションにおいて生起している対人経験の主要な要素が、そのままキャッチボールの中にも存在していた。さらに言えば、キャッチボールには、お互いの攻撃性の表現を言葉によるやりとりよりも自然な形で、お互いにとって安全な形で行えるという利点がある。また、言葉そのものの内容の活用はできないが、ボールの速さ、強さ、重さ、回転の仕方、モーションのかけ方などによって、感情の量と質を原始的な形で伝え合うことができたのではないかと思われる。このように、キャッチボールという方法は、繊細児に限らず、一般に感情障害児が治癒していく際に重要とされる情緒的な交流や攻撃性の表現という課題を比較的無理なく遂行できるというメリットがある。CIが示したプレイידיでの変化は、キャッチボールによるコミュニケーションによって内面の表現が豊かになっているプロセスをよ示している。これは、本CIにとって、繊細という症状が克服されていく経験というよりも、言葉によるやりとりが可能になる前提的条件である情緒の交流の基盤が形成されていくために必要な時間だったのではないか。

(2) セラピストののかかわりのスタンス

本事例におけるThの存在は、Clにとって、学校の先生でもなく、かといって友達でもない「斜めの関係」にある。また、Clにとってプレイ习近平总は、学校でもなく、普通の遊び場でも違う「中間の場所」として存在している。これらの中間性を帯びた経験が、Clにとっては自分の内外の葛藤の世界と外の世界を区切る役割を担っていたことが考えられる。そのためで、相談室という場所とそこに通った1年間は、Clにとって、学校に行っていない自分を、周囲のそして自分自身のマイナスの残差から守ってくれる場所であったとともに、外の世界とつながっていく社会化のための準備期にいたのではないだろうか。

Thの学校に関する考え方については、かかわりの当初から、Clが学校に復帰するかしないかはどちらでもよい、それよりもClが自分の力のいく将来の選択ができることが大事であると考えていた。母親をはじめ周囲の期待は復学してくれることであったので、Thは図らずも周囲の期待（登校刺激）からClの自由意思を守る役割を果たすことになった。すなわち、Thが学校の教師とは異なり、学校に復帰させなければならないという役割意識から自由な場でClとともに居ることができたこと、これが、Clに余分なプレッシャーや与えず、自分探しを保証するうえでプラスに働いたのではないかと思われる。

次に、Clの家族が抱えている問題として、母親の嫁姑（特に祖父）との関係、そしてその関係のしこりを背後で支えている夫婦関係のあり方、Clの症状を形成している可能性が考えられた。特に、Clは転校して祖父との同居がはじまった時期に、小学校3年という若さで胃潰瘍を患っている。この時期から、家庭の中に母親の居場所がないことでいったこと（パートの仕事に出ているときが一番ホットとするという母親の発言）、その母親の葛藤を取り受けた形で本Clの症状が形成され、また、その背景には、社会化を促す安定した母子関係が形成されていなかったことが考えられる。なお、これらに関しては、
母親面接の担当者による8回の心理教育的カウンセリングがすでに行われていた。Th個人としては、Clの家族に以上のような問題点が示唆されていたが、以下に理由により、家族関係に介入することは差し控えることにした。

すなわち、すでに高校生という発達段階に達した本Clをサポートするには、母子関係のやり直しよりもむしろ親から手に距離を取り、自分の将来を積極的に考えていくことをサポートすることで、親からの自立を促すやり方が適切であると考えられた。その判断の背景として、本Clは、識黙という症状を抱えているが、人格障害のように不安定で人を試してくるような人格的な歪みは感じられること、多少の強迫性は感じられるものの、ほとんど毎回決められた時間に来談することができること、場面識黙という症状自体も、それほど重篤なものではない、将来、「大人の無口」という性格に移行していける可能性を感じられること。そして、嫁姑の関係や夫婦関係は、Clにとってそれがよいものであれ成長の妨げになるものであれ、そのような形で長年にわたって微妙なバランスを保ってきたものであるゆえ、そう容易に変化は期待できないし、また、一概に変化を起こせばよいというものでもない。このような見地から、Clの精神的健康な部分に着目することで、Clにとって自分探ししありやすい人間関係の土壌をThとの間に作り、時にはClの味方になって親の干渉から守ってやりながら、自己の立て直しの作業を見守っていくことを重要視した。

(3) セラピストがプレイセラピーの単調さに耐えることの意味

言葉によるやりとりを介さず、ただ黙々とキャッチボールをするという、きわめて限られたチャネルでの単調なかいかわりを続けていく中で、Thの側には、こんなことを続けているのだろうかという焦りや話ができるようになってほしいという期待に応えてくれることへの寄り立ち、そしてその結果、援助者としてClに何もしてやれていないことの無力感そのものの連鎖の感情が織り返し体験されていた。今から振り返ってみると、これらは、話せるようになることを治療目標に置き、援助者として何か意味のあることをやりとげたいと考えることからくる、Thの焦りであった。しかし、Thが体験した焦りや苛立ちは、Clの周囲の人たちが体験していた感情と同様であったと思われる。特に、Clに対してできるだけ暖かくかかわろうとしながら、はっきりした成果が目に入えないことで焦りや無力感を感じていたであろう母親と類似の感情体験をしていたのではないか。このように、Thに無力を感じさせながらも依然として黙ったままで来談し続けるというClの行動には、どのような意味が込められていたのであろうか。

語らないことは、それ自体Clの「表現」であり、そこには意識では話したいけど話せないという葛藤がありながらも、その背後にはClの無意識の主体性が存在しているように思われる。より端的に言えば、そこには、Cl自身の攻撃性が見えて取れる。識黙という症状に持続的に直面することでThの側に生じてくる攻撃性がClに投射されている部分(河井ら、1994)を差し引いてもなおである。Clは識黙という症状を持つことによって、自分の中的攻撃性を防衛している。正確に言えば、攻撃性が表出されるとき周囲にいる家族たちをとことん傷つけてしまうし、それによって自分も傷ついてしまうであろうような内面のわだかまりを、識黙になることで抑え、その衝動から周囲の者と自分自身の双方を守っていたのではなかろうか。このように考えると、Clの攻撃衝動にどう対処し、Clが症状を持たなくてもよいような新たなバランスをどのように回復していくかという問いは、Th
が CI とかかわっていて自分自身の中に引き起こされてくる諸感情にどう向き合っていくかという問いとして、そのまま置き換えられるということである。Th は、単調なキャッチボールの繰り返しによる退屈さや焦りなどの感情にどう対処したのか。あるいは、援助者としての主体性をどう維持したのか。実は、このことが本プレイセラピいで最も丁寧に内省され考察されなければならない部分である。これは、神田橋（1990）が、「逆転移の活用」として提唱している治療的工夫のひとつでもある。

(4) セラピストとしての主体性

まず、Th に体験される退屈さやイラ立ちや無力感をかろうじて支えてくれたものは、CI に接する際のこちら側の意識のあり方である。それは、先に述べたように、Th が体験していた感情は Th だけが特別に感じているものではなく、母親をはじめ CI の周囲の人たちが体験していた感情と同質であろうということ。そして、それこそが CI にとっての「表現」であるということ。それは、終始沈黙という形でなされた自己主張であり、プレイセラピィの場でいえば、ボールの投げ返しが CI にとっての言葉であったということ。したがって、Th が自分の中に立ちこんでくる感情を自分自身で「抱えること（Winnicott, D.W., 1971）」が、CI の攻撃的への対処能力を Th の内側に育み、それが対人的相互作用によって CI に伝わり、減衰という症状を必要としない新しいあり方を可能にしていくということである。このような認識によって、援助者はある程度心のゆとりを確保できるのではなかったか。ただし、これらは Th の意識のレベルで行われた、いわば「受け身の主体性」の回復および獲得に留まるものである。

Th としての主体性をより積極的に確保するための第二の工夫としては、Th の側に立ちこなってくる攻撃性を、キャッチボールの中で表出することが可能であったということである。例えば、Th が CI に強い球を投げたり、取りにくい球を投げるという形で表出できるし、CI も投げ返すという形で、それに応えることができる。すなわち、キャッチボールという守られる形で自然にお互いの攻撃性を出し合う。また、Th が自然に主導的に振る舞う場面として、ジョギングの後の体操のときに、コッチコッチに緊張した CI の身体に触れ、弛緩の練習をさせることもできた。このような場面は、Th がマンネリ化しがちな CI との関係から距離を取り、自分自身の Th としての能動性を回復していく工夫として重要であった。

第三に、Th には、決して画期的なものではないが、第 3 章の(2)で確認されたような CI の前向きな少しずつ変化を肯定的なものとして大事に扱えるままでしが要る。そして、CI が現時点において持ち合わせているコミュニケーションのチャンネルを見つけ出し、それを大いに活用していく姿勢も必要である。例えば、Th がボールの投げ方やプロ野球の情報などをいろいろ CI に教えてもらうことなどは、その好例であったろう。これらのことは、いつまでたっても話さない CI との関係そのものをそれなりに楽しめることにつながるだろう。

(5) クライアントの「持ち味」を生かすという視点

本 CI は、2 つの追い打ちをかける出来事により、高校入学後間もなく登校意欲を失うが、これは単に CI が言葉がうまく話せないことだけが原因となって起こったことではない。不登校の背景には、CI が入学当初から、言葉ではなく身体のレベルで、学校が持つ
霧関気への達和感や息苦しさを感じていたことが考えられる。すなわち、本Clは、その学校があるいは現在のどの学校にもありがちな、明る元気な教室、そしてそのような学校の文化にそもそも-dismissed-かったのではないかということである。

学校という集団の中で、生徒たちは自分が仲間はされないようにするために、とくに明るく元気でノリのない自分を急い、時に軽いジョークなどを添えながらかわわろうとしつつある。しかし、田んぼほと海を南北に見渡せる地域の風土、そして比較的言葉の少ない家族の中で育ったClにとって、特に義務教育から解放された生徒たちが集う活気に満ちた高校生活は、かなりのカルチャーショックであったに違いない。もっとと感受性が強く、神経質な面があったにせよ、中学校までは地元ののんびりとした風土の中で、まだ分かりやすくすかったのではなかったか。考えてみれば、一昔前の農家などには、このClのように寡黙な青年は結構たくさんいたのかもしれない。この高校に限らず、現在は、Clのように流行にはあまり関心を示さず、対人関係には敏感な子どもたちが、とくに不適応を招いてしまうような時代なのかかもしれない。その意味で、Clが学校へは戻らず、明るくノリのよい会話がなくても動まる塗装の仕事をはじめたという選択は、当時のClの人格や家族的文化を考えると、最も無理のない選択であったように思われる。このような観点からすれば、Clの誠実という症状は、やがて、彼が生まれ育った地域や家族の風土と無理なく折り合っていく、「大人の無口」という性格としていつの間にか治癒していく姿を十分感じ取ることができるのである。

5. まとめ

最後に、思春期・青年期のクライエントとかかわる際に、セラピストの側に必要な心構えについて触れておきたい。思春期・青年期の臨床では、セラピストの力を入れるとは裏腹に、クライエントの変化の差に直接させられ、とくに時間とエネルギーが浪費されているように感じやすいものである。しかし、そのような焦りは、周囲にいる親や学校の教師たち、そして実は誰よりもクライエント本人が体験している感情であり、時にそれはクライエント自身を追い詰め、責めざるをえないものになりがちである。

このような状況の中で、援助者にできることは、クライエントの現在のありのままの状態が十分に保証される人間の環境づくり、これ以外にはない。治療をはじめ教育や援助の発想は、本人にまだ見当を失っていない力に着目し、それを人為をもって引き出そうとしつつある。そのために、本人が今現在持っている手書きの力のことに目が届いていないことがしばしばある。ありのままの状況が保証されるということは、決してセラピストとして「なる術がない」ということではなく、今あるコミュニケーションの手立てを十分に活用し得つかわっていくということを意味する。まずは、目の前のクライエントをよく見るところ、ここからすべてがはじまる。

具体的には、クライエントの話ができるという現状をまずは十分に保証し、待てること、そして、目に見える効果という観点を差し控え、寄り道や時間の無駄とも思われるようなかわりを続けていけること。それは、いつになっても話をしてくれないクライエントとの関係それ自体を楽しめたことだったのであるが、その大切さは、かかわっている現時点で感じ取ることがとても難しい。したがって、援助者は、一見意味がないように思えるかわりの意味がいくらかでもわかることが必要であろう。すなわち、クライエ
ントとのかかわりの中でセラピストの内部に生じてくる様々な感情は、セラピスト個人がただひとり体験させるられている感情ではなく、クライエントにかかわろうとする周囲の人の多くが体験している感情であること、したがって、それらの感情をセラピスト個人が「抱えていく」工夫こそが、実は、クライエントを、そしてクライエントの周囲の人たちを支えることにつながっていくのだとということ。目に見えないこの作業こそが、セラピイの根幹に据えられる課題だということである。

そして、最後に、本事例のクライエントは、もともと言葉の少ない家族、言葉の少ない風土の中で育ってきたことを思い起こした。不登校の子どもたちも、ひとりひとりみんな違う。今、目の前にはいるその子にとって何が必要か。このことを、その子の10年後、20年後の姿をありありと思い描きながら考え続けていくこと。そのような地道な工夫と努力こそが、クライエント本人が何より必要としている援助の形なのではないだろうか。

文献

相場壽明（1991） 選択性緒語の理解と治療。 特殊教育学研究，29（1），53-59。
エリクソン,E.H.（1959） 自我同一性。 誠信書房。
畠瀬直子（1978） 心因性緒語症児のための心理療法仮説。 児童精神医学とその近接領域。
第19巻第4号。
神田橋條治（1990） 精神療法面接のコツ。 岩崎学術出版社。
加藤隆勝・高木秀明編（1997） 青年心理学概論。 誠信書房。
河井芳文・河井英子（1994） 場面緒語児の心理と指導。 田研出版株式会社。
大石英史（1997）「抱え」によるアプローチが関係への依存を誘発した一事例。 心理臨床学研究，14（4），436-447。
内山喜久雄（1959） 小児緒語症に関する研究。 北関東医学9，786-799。
上田覚子（1997） 場面緒語とその心理機序。 山口県立大学文学部卒業論文。
ウィニコット,D.W.（1971） 遊ぶことと現実。 岩崎学術出版社。